

大井町立大井小学校

研究テーマ：子ども自らが問いをもち、学び合い、深め合う授業をめざして

1 実践の目的

目的は二つ。一つは学校教育目標の実現。もう一つは、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善である。前者については、『自分づくりに励む子ども』『未来づくりにかかわろうとする子ども』の育成」という学校教育目標の具現化を目指して、「納得解が得られる授業づくり」と「向社会的行動につながる授業づくり」に取り組む。納得解を得るための「問い」と、向社会的行動につなげるための「学び合い」を軸に、校内研究を推進する。後者については、算数と道徳を中心に学校全体で授業づくりの視点を共有し、授業改善に努めていく。

2 実践の内容

(1) 研究の重点

① 子どもの「問い」の具現化

「問い」をもつ子どもとは、どのような姿を捉えるのか。その部分を、算数と道徳の各教科で追究した。まず、子どもが「問い」をもつのは、安定した状況から不安定な状況に置かれた時だと考えた。例えば、算数では、既習から少しジャンプした未習の問題に出会う時や、予想と違う答えに出会う時などである。一方、道徳では、当たり前前と思っていた価値観が揺さぶられる時や、自分とは異なる意見に出会う時などである。このように、“安定からの不安定”をキーワードにして、「問い」をもつ子どもの姿を具体で明らかにしようとした。

② 「学び合い」に向けた教師の関わり

充実した学び合いを目指して、聞き方や話し方（説明の仕方）の指導のポイントや価値付けするための効果的な声かけなど、教師も学び合う一人としてその関わり方を追究した。子ども同士をつなぐコーディネーターの役割としての関わり方を明らかにしようとした。

③ 「深め合う」授業像の共有

各教科等に応じた見方・考え方に着目して、「深め合う」子どもの姿から、その授業像を明らかにしようとした。

(2) 全体授業研究

研究授業の協議では、教師の教え方ではなく、子どもの学びに焦点を置き、その言動やそれに紐づけられた思いの読み取りを大切にしたい。具体的には、jam board を活用して「問い」「学び合い」「深め合う」の3本柱について、子どもの具体の姿と、そこから見えた手立てに関する成果と課題を議論した。また、明日の授業に生かしたい内容も全体で共有するようにした。

算数では東京家政大学教授 石田淳一先生を、道徳では昭和女子大学現代教育研究所会員 高木くみ子先生を講師にお招きし、ご指導いただいた。算数では、「学び合い」を深めるための指導や数学的な見方・考え方について、道徳では、「問い」のある授業展開や価値に迫るための具体的な手立てについて学ぶことができた。

(3) 研究推進だよりの発行

研究授業を通して見えた成果と課題や、授業改善に向けた指導のポイントなどを発信するようにした。年間を通して継続的に発信することで、学校全体で同じ方向を向いて研究できるように努めた。

3 実践の成果

(1) 本校で育成を目指す子ども像の共有

研究教科である算数と道徳において、目指す子ども像を学校全体で共有することができた。その内容を以下に示す。

[算 数]

- | | |
|---------------------------------------------------|---------------------------------------|
| ① 日常的な事象や数学の事象から問いを見だし、解決に向けて自ら一歩を踏み出そうとする姿 | ② 友達の学びに関心を持ち、その人が考える論理を理解しようとする姿 |
| ③ 統合・発展の見方・考え方を働かせながら、概念としての理解を深めたり、数学の世界を広げたりする姿 | ④ 経験や既習と結び付けながら根拠を明確にし、筋道を立てて考え、説明する姿 |

[道 徳]

- | | |
|-----------------------------------------------|--------------------------------------|
| ① 道徳的価値に迫る問いを持ち、自らの内面に生成される納得解を獲得しようとする姿 | ② 友達の意見を尊重し、認め合いながら、物事を多面的・多角的に考える姿 |
| ③ 自己を見つめ、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践しようとする姿 | ④ 目に見える行為だけではなく、それを生んだ心情について考え、議論する姿 |

(2) 本校全体で取り組む手立ての共有

研究テーマに迫るための手立てを職員全体で検討し、明文化した。同じ方向で授業づくりに取り組める点や協議の視点が明確になるという点で成果が見られた。それらの手立てを以下に示す。



4 今後の展開

今年度は、「Try」という言葉をスローガンに掲げ、一人ひとりが“やってみる”研究を推進した。その結果、目指す子ども像や手立て等が明文化され、授業を一つでも改善しようと取り組める環境をつくることができた。今後は、それらの実践を振り返り、手立ての具体を共有しながら内容を洗練していく必要がある。また、「深め合う」授業像の共有については、残された課題として次年度に引き継ぎたいと考える。今後も、主体的に生き生きと学ぶ子どもの姿を目指し、学校研究の推進を図っていきたい。